

社長介護記 III-2

平成20年6月22日

和田 宏

桂チャボの「社長」が体調を損なったのは昨秋のこと、早いものでもう直ぐ満8ヶ月になろうとしている、厳冬の寒さは電球と電温ボードで凌ぎ、年末には一旦回復して時を告げ始めた（写真）、姿勢は徐々に悪くなっているが、新緑の春には体力が戻って伸び上がって健気にも時を告げていた（5月6日まで、録音あり）然し残念ながら今はもう一度啼いて欲しいと願う気持ちが儂い事だと感じさせる事態が垣間見られるこの頃である。

彼のプロパティは車庫の窓の下に設置された50cm立方体の段ボール箱で、フローには3cm粗殻が轆いてある、100Wの電球は缶で保護されている、窓の高さには30Wの蛍光灯、夜間のケア一用です。6月になってからはアースノーマットを常用、お陰で車庫内はモスキートフリーである、新顔は20Wの扇風機、言うまでも無く来るべき夏の暑さ対策である、

餌容器は4月で止めた、首反りで食べられないから、水容器は5月で止めた、首振じれで殆んど呑めなくなったからである、

現在の日常は、5時30分にぐる巻きのタオルとエリザベス（布の首巻き）を外すと「コッコッココ」反応する、あたかも「来るのが遅いつ」と言っているようである、体が拘束されていたことと喉が渴いたのを恨んでいる。タオルの中にはころっと2-3個の糞、糞はオリーブの木（なんと今年は実を付けている）の下に撒いて、タオルは重曹洗剤で洗う、給餌の前に、先ず首を体重牽引する（写真）、トサカを持って体重を掛けたり外したり3分位、目を見ていると不満では無いようである、次に体を支えて振じれ首のストレッチを50回、この間ウツトリと気持ちよさそうな目は希望を感じさせる短い時間である。

スポイトで水を与えてから、食事の番だ、食パンとヒアルロン酸をリポビタンドリンクで練った後、穀物貝殻等の混じったチャボ餌を混ぜて練り、好物の大根葉で包んで小さな海苔巻き状にして一個ずつ口に運ぶ、口に入ると条件反射的に飲み込んでくれる、終わったら再び首牽引と首ストレッチをして休憩時間だが、これが大変、首が然るべき姿勢（良い姿勢ではない）に収まるまで痛みを伴い振じれる、痛そうに声を上げながら体形を整えようとする時間は可愛そうである。お腹を上にして寝せると楽なのだがその姿勢は誇りを傷つけるらしく永くて30分しか続かない。

夕食までの時間に暇があれば小屋を覗いて糞を片付ける、面倒だが踏みつけられる前に始末するほうが楽である。

食事は2回で、夜は9時頃タオルでぐる巻きにする、「キュッキュッキュッ」と不満の声を発するが床に寝せると直ぐ目を閉じておとなしくなる、楽になったのであろうがその前が辛かったのかと思うと哀れである。

暖かくなってからは毎日2時間くらい日光浴だ、フェンスで囲ったプラスチックトレイ（深さ20cm）の中で糞にまみれて昼寝をする、野良猫が覗き見ることもあるがフェンスとトレイは10cm以上離れているから安全である。

月間の行事をおさらいすると、足の爪切り（庭で元気にミミズを探していた頃は爪が磨り減って蹄鉄が欲しい位であったのに）、蹴爪切（切りすぎると血が出てくるからヨードチンキを備えてある）。

嘴切り、月に1mmくらい切り取る。羽虫予防、羽の隙間から肌を見て虫が居なくても羽と小屋の壁に防虫剤を少量スプレーする。

水虫対策、今社長の足は黄色の鱗で覆われている、然し油断すると瘡蓋だらけになり兼ねない、ダマリン液を塗布してやる。

b e t t e r を超える介護をしているつもりであるが限界を感じないわけではない、

体調が良くないと感じさせる理由は胸のさき身が細って体重が減ったこと（580gr）とトサカが薄くなって弾力も失われ横に倒れたことである、この1ヶ月もう一度啼いて欲しいと願って介護しているが難しいのかも知れない、目が不自由になってから1年を越えた、丁度180度振じれた首が痛ましい、首が反ってしまった時大変だと感じたが首振じれは想像を超える症状である。良くここまで続けてきたと思うが正直なところ唯一羽のペットでしかも小さい桂チャボだからからなんとか出来た、それと首が振じれても本能とは言え時を告げた、コケコッコと啼いて見せた姿は感動を禁じえなかった。感動を有難う。

元気だった頃の社長は飛翔力があって物干し台で眠っていた、庭がテリトリ一だと思っていたから、上空を鳩やカラスが飛んでも警戒音声を忘れず、またガラスに映る自分の姿を仮想敵として毎朝蹴りを入れたり、視力が衰えた柴犬が視界から姿を消すと奇声を発したり多忙であったが、もう心配するな。

20年7月11日追記

桂チャボの「社長」は力尽きて7月3日に永眠した、享年7歳、冥福を祈る。



12月27日撮影 一旦元気を取り戻した



5月17日撮影首牽引リハビリテーション